

パリ国立高等音楽院教授を30年勤めるクロード・ドゥラングル氏の久々の洗足学園音楽大学来校となった今回のマスタークラスは、開催前から学生達の高い注目を集め、当日会場となったアンサンブルシティーの講義室は学生達の熱心な眼差しと熱気につつまれました。

4名の受講生はフランスサクソフォン音楽の正統的かつ重要なレパートリーを披露しました。

トマジ「サクソフォン協奏曲」を演奏した学生にドゥラングル教授は、素晴らしい演奏、好みの演奏だと賞賛しつつ、作曲家がコルシカ島出身だという点に触れ、ラテン的な明るい表現を、また弦楽器的な表現というよりは金管楽器的な寛容な表現を、とアドバイスしました。それにより音楽的な色彩感が増し、さらに表情豊かな演奏へと変わったことが印象的でした。

イベール「室内小協奏曲」では、この作品の難しさは運指のテクニックよりも、全ての音を均等かつ明瞭に「発音」していくところにある、そのためには息の連続性を大切にすべきだ、という指摘が印象的でした。

リュエフ「ソナタ」ではこの作品の形式と時代性、ドデカフォニーにより構築された音楽であることに触れ、よりこの作品にあった音色や歌い方が示されました。

デザンクロ「プレリュード、カデンツァとフィナーレ」ではこの作品において重要な、広い音程の跳躍でのレガートを演奏する際に露呈する基本的な奏法の問題、息の連続性、オクターヴキイの操作、音域によって喉を変化させないことなど、学生の演奏においてよく見られる問題点が指摘されていました。

いずれの受講生もドゥラングル教授の指導と実演に直接触れることにより演奏が大きく変わっていった姿が大変印象的でした。

